

ショル兄弟と白バラの運動について

去る4月、国立滝乃川学園に神学者の村上伸氏をお迎えして「獻げる」という題で講演をいただきました。氏の話の中心に戦前戦中のドイツのプロテスタント神学者、ボンヘファー (Dietrich Bonhoeffer) の話が出てきました。私がこの件で質問したのを覚えている方おられるでしょうか。つまり、ボンヘファー氏の現代ドイツでの位置付けです。その際に、私は同じように戦中のドイツでナチス体制への抵抗運動をした人達として、表記のショル兄弟に言及しました。

さて、このショル兄弟。戦後半世紀を経た日本で、知る人はほとんどいないのではと思います。この機会にショル兄弟のことを少し紹介しておきたいと思います。ドイツ人（だけでなく欧洲人）は歴史に名を残した人々を顕彰するのが好きです。ボンヘファー氏の名を冠した通りがいくつかあるそうですが、ショル兄弟 (Geschwister Scholl) の名は、ミュンヘン大学前の広場に残り、またその妹ゾフィーの名は、今春(2002年)のトマスクック鉄道時刻表No.900に掲載されたベルリンとミュンヘン間の急行 IC817 の名に「SOPHIE SCHOLL」と銘記してあります。

日本が太平洋戦争に突入する2年前、1939年9月、ナチス・ドイツのポーランド侵攻によって、第二次世界大戦は始まりました。ドイツはすでに独裁者ヒトラーの専制下にあり、またこの偏狭で病的な民族主義者は、かねてからの主張であるユダヤ人の撲滅と追放を企て始めました。強制収容所からの生還者で『夜と霧』の著者であるフランクル (V. Frankle) が、「一体このユダヤ人抹殺という恐ろしい行為を当時のドイツの人々は知らなかつたというのだろうか」と問うていますが、確かに



ハンスとゾフィー=ショル、A=シュモレル

大方の人がこれを知りながら沈黙してしまったのです。その一方、ごく少数ですがこれらに心を痛め、ヒトラーとナチスの暴虐をそして進行中の戦争を止めようとした人達が存在したのもまた事実です。

1942年春。まず南ドイツの大都会ミュンヘンにナチスとヒトラーへの抵抗を呼びかけるビラが配されました。それは初め差出人不明の形をとり、「白バラ通信」と題された謄写（とうしや）版刷りの印刷物で、各戸に投函されたのです。一体誰がこれを？。やがて、市の中心部から北へ伸びる大通りルードヴィヒ通りに、「ヒトラー打倒！。自由万歳！」と白ペンキの落書きが書き連ねられました。一旦その勢いは収まりますが、43年に入り、スターリングラードでドイツ軍が決定的な敗北を喫した頃、再度ビラが巻かれたのです。そしてこのビラは南部の大都会、シュトゥットガルトやフランクフルト・アム・マインなどに広がって行きます。

ナチスとヒトラーの独裁体制を支える秘密警察ゲシュタポは、この頃ようやくミュンヘン大学の学生グループの存在に気づき始めました。そして2月末のある早朝、大学本館の階段にビラを撒いた学生がいるのを見つけ警備員が玄関を閉め、通報を受けた警察官が閉

じ込められた二人を発見したのです。二人は逮捕・連行され、取調べを受けますが、わずか四日目にナチスが創った民族裁判所で、長官フライスラーじきじきに死刑を言い渡され、それは即刻執行されたのです。極刑を覚悟していた彼らは最後まで毅然とした態度で尋問にも耐え、同調者の名を漏らさず、自信に満ちた姿のまま天に帰って行ったと言います。

白バラグループの中心には、兄弟の他に医学生でロシア生まれのシュモーレル。同じく医学生のプロープスト。哲学の学生グラーフ。同じく教授のクルト＝フーバーらがいて、この人達もその年の中には死刑を免れませんでした。彼らに共通していたのは人間を人間として扱わないナチス体制への疑問を強く持っていたこと。戦況の暗転に伴い、独裁者と共に沈むかあるいは命を賭してドイツ本来の民主的・文化的な国家を取り戻すか。という切羽詰った気持ちを持っていたことでした。それは特定の政治的背景をもった他の抵抗運動とも違い、純粋で無垢な青年中心の決起でした。



ミュンヘン大学本館とショル兄弟広場

そして忘れてならないのは、彼らの多くがその異を唱える勇気を神から授かったことです。ショル兄弟の姉インゲはこう書いています。自分達の行為が発覚すれば、という恐怖にさいなまれた時、「彼らに残されたことはただ、自分の心の底深く降りて行き、そこで一つの

声が、おまえ達は正しいことをしている、おまえ達はこの世でまったく孤独であろうとも、これをしなくてはならぬ、と語りかけるのを聞くことでした。そのような時彼らは、わだかまりなく神と言葉を交わすことができた、と私は思います。死よりも近くキリストがいた」と…。

彼らが処断されてしまった後、それに続こうとする者は現れませんでした。そして戦争の砲火は、45年春、ヒトラーがベルリンの官邸地下壕で自殺して果てるまで鳴り止みませんでした。彼らの行為は歴史の歯車を切替える力とはならなかったのです。しかしそれでも意義深いものなのです。

全体が誤りに陥り、断末魔へと走る時、正しくあろうとする人は、余程勇気を持たないと声もあげることはできません。しかしその勇気はどこから出てくるのでしょうか。何を抛り所とするのでしょうか。やはり私は絶対者の存在なしには、それはなし得なかつただろう、と思います。そして彼らの信仰とその生き方こそ、平和な世に生を享けた私達にも勇気を与えてくれるものなのです。

日本も同じ時期、軍国主義の下で侵略戦争を推し進めていたわけですが、白バラに比した勇気ある人々を探し出すのは困難です。先の大戦は、私達の社会と国民性に常に反省を迫る材料です。そして、この白バラ運動が伝えたものは、洋の東西を問わず普遍的なメッセージだと受け取れます。